

サングラスどんなに見ゆと妻に聞き 溪水

結婚したばかりの熱々カップルであれば、間髪を入れずに「素敵、よく似合っているよ」との弾んだ言葉が返って来るであろうが、もう倦怠期に入っている中年夫婦では、「何をもてようとして若作りしているのよ」という半ば冷笑的な言葉が返って来るかも知れない。しかし、永年苦楽を共にした夫婦であれば、そこには偽りのない心からの静かな言葉が交わされるのであろう。掲句は年輪を重ねた良き関係にある夫婦の間であるからこそ成立する一句なのである。

夏座敷声をととのへ口を切る 秀一

何らかの大事な事柄を決めたり、あるいは厳肅な事柄を始める席が、夏座敷に設けられている。一定の緊張感が漂うなか、仲立ちの者、あるいは一方の当事者が第一声を発した。「声をととのへ」というフレーズによって、その席の目的や雰囲気を読み手に的確に伝わって来る。「を」と「に」の使用は、一般的に俳句を散文的にする危険がある。しかし、掲句では、「声を」、「口を」として「を」を二回使用しているが、決して散文的印象を与えることがない。

雲の峰一気に大空描くなり ヤエ子

大空は地平線や水平線を下側境界として昼も夜も常に存在するものであるが、太陽のざらざら輝く夏空に入道雲がもくもくと立ち上がることによって、青空の部分が眼前に現われたのである。まさに空は雲という異物の存在によってこそ実体あるものとして鮮明に描かれるのだという、作者のダイレクトな把握が心地良い。「一気に・・・描く」とすることによって、雲の峰の動きまで活写されている。

暑き町しつかり抱かれ赤ん坊 ヤエ子

赤子の体温は高い。赤ん坊を抱きあげれば、己が身にたちどころに汗が噴き出る。しかし、母親にとつて赤子は自分の分身であり、天から授かった宝物である。部屋に居るときであっても、床に落とさないようにしっかりと胸に抱きかかえるのである。いろいろな障害物のある街中に出るときには尚更である。まさに赤ん坊を抱くとは命を抱くことである。

掲句では、「抱かれ」となっており、他者が赤子を抱いている様子を詠んでいるが、「抱いて」にすれば作者自身が赤子を抱いていることになる。文芸上の眞を重視すれば、実景

から離れても、「抱いて」の方がよいかと思う。

酒呑まぬ女家族や冷奴

秀一

俳句が十七音という短詩型でありながら、句意を伝達できるのは、作者（詠み手）と鑑賞者（詠み手）との間に、題材の事柄についての暗黙の了解または共通認識が存在するからである。

掲句の場合には、酒の肴には冷奴がよく合うという認識が一般にあるからである。現今は、女性でも酒を飲む者が多くなって来ているから、「女家族・・冷奴」だけでは俳句として成立しない。「酒呑まぬ」という限定の修飾フレーズをかぶせることによって、俳諧味が出て来るのである。単に「酒飲む」ではなく、「酒呑む」としてあるのも「のん兵衛」を連想させて面白い。表記にもよく注意が行き届いている。

緑陰や鳩と語らふホームレス

貞勝

「ホームレス」という言葉、また、それが意味する事柄を俳句の中に持ち込むことに対して、頭から否定・嫌悪する立場の結社がある。筆者は、俳句の題材にはタブーを作らず、短詩型の俳句の力を信じて、社会のあらゆる事象を詠んで行こうとする立場をとるものがあるが、掲句は、前者の立場をとる者であっても、俳句として認め得る境界領域にあるものと言えるであろう。「鳩と語らふ」という措辞を置くことによって、「ホームレス」というきつい言葉が中和されているのである。

しかし、鳩との交流はあっても、社会一般との交流がないことを連想させるので、寂しくて厳しい内容の句ではある。

老鶯の真似の口笛かすれけり

友子

掲句は、夏鶯の鳴き声を口笛で真似して野山を徘徊している間に、その口笛がかすれて来たと言っている。すなわち、一定の時間の経過内で起きた事柄を詠んでいる。

よく俳句は、時間（事象の生起・消滅に係る時の経過）を詠むのではなくて、時刻（事象の生起・消滅した特定の時点）を詠むべきであると言われ、また、一般的に「時刻」の俳句が成功する確率が高い。しかしながら、掲句は、「口笛がかすれる」という作者本人に生理的に発生した具体的事実を前面に据えることによって、「時間」俳句でありながら、内実をともなった佳句となっている。

空と海とけ合ひ由比の梅雨ぐもり

幸

作者は由比の海岸にひととき旅の足をとめている。梅雨ぐもりの空は混然一体として海と溶け合い、空と海の境界線がはっきりしない。

地名を単に読み込んだ俳句は、ともすれば観光地俳句的になりやすいが、掲句の場合には、空と海がとけ合うというフレーズによって、立ち位置である由比の海岸線の長さ・広がりも見えて来て、地名・由比が生きているように思える。

片陰をゆくハマ風や野毛の坂

眞三

この「ハマ風」は海岸地帯で時間帯によって吹き変わる二種類の風、すなわち、海風（海から陸に向かって吹く風）と陸風（陸から海に向かって吹く風）のうち、前者の海風に相当するものであろう。野毛坂の通りに沿って片陰が生まれ、そこを「ハマ風」という涼しさの風が行き渡っているのである。ハマ風は「ヨコハマの風」にも通じ、明治の文明開化の先陣を切った「横浜」のシンボルとしての野毛坂の地名が効いている。

会場・桜蔭会館 文責・増田 守